
親友と共に幻想入り

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友と共に幻想入り

【Nコード】

N8063U

【作者名】

柊

【あらすじ】

ある日柊とその親友月冨が幻想入りします

日常書いたりバトルも書いたりできたらいいなあ、と思っています。

おかしな所があってもそこはご勘弁を

注意

東方projectの二次創作に当たるものだと思われ
ます
そういった類のものが苦手な人は音速を超えて逃げて
ください

S
K
Y
P
P
E
I
M
·
M
a
n
n
z
o
k
u
s
a
n
n

プロローグ(前書き)

記念(?) (すべき) 話目!

プロローグ

「よし、忘れ物はない・・・よな?」

「行ってきます」

誰もいないが昔からそういつてしまっ

鍵もかけたし戸締りokと

「おはよう 柊しゅう」

後ろから男に声をかけられた

柊「ああ おはよう大佐」

こいつは斉藤^{さいとう} 月冴^{つきさき}

昔からの俺の親友で今も一緒に登校してる仲だ

月冴のことを大佐と呼んでいるのは身体能力が高かったりいろいろなことで強いからだ

柊「それにしてもお前は丁度俺が出る時に来るよなー」

月冴「それは お前がいつも定時に出てくるからだよ」

流石親友そこまでわかつてるか

月冴「そうだ 今日借ってたゲームを持ってきたんだ」

ほら、と言いながら月冴はゲームを渡した

柊「持ってくるなよ まあいいやちょっと待ってる これ置いてくるから」

そう言うと柊は鍵を開けゲームを置いて帰って戻ってきた

柊「今度こそ行くぞ」

月冴「時間大丈夫か？」

柊「お前がゲーム持ってこなければ大丈夫だった」

そう言いながらも怒っている様子ではなかった

そして二人は急ぎ目に登校した

柊と月冨は同じクラスなため登校してからも一緒に行動することが多い

柊「余裕で間に合ったな」

月冨「もうちょっとゆっくりでもよかったかもな」

そういうけど後5分でHRか

柊「早く座ろうぜ」

月冨「そうだな」

二人はそれぞれの席に着いた

HRも終わり授業に入った

授業をほとんど聞き流して外の風景などを見ていた生徒たちが画用紙などを持って外に出てきてるところを見ると美術の授業なのだろう

こういう時にはあのセリフだよな「見ろっ！人がゴミのようだ！」・

・
・
・
まあ 口には出さんが

そんな事を考えていると不意に名前を呼ばれた

「深神みかみ！この問題を解いてみる」

声の主は数学の教師のものだった おそらく俺が話を聞いてなかったから

解けないだろうと思いい問題を吹っつけたのだろう

答えられなさそうな奴の困ってるそこなんて何が面白いんだろうか？

俺は「はい」と返事をして前に出る それと同時に黒板の前に出る前に

黒板に書かれていることを見て何をするかを理解する

黒板に書かれた問題を解き「できました」と言い席に戻る

「お、おう良くできている」

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った

やっと終わった なんて思いながら欠伸をした

・・・そのあとの授業もあまり聞いてなかった

そして5時限目は美術の授業だった

「今日は外に風景画を書きに行くぞー」

という事で外に出ることになった

大半のやつはさっさと描いてサッカーをしたり話しをしたりしている
そんな事でいいのか？なんて思うが先生が「終わったら好きにして
いいぞー」

と、言ってるしこの状況に何も言わないからいいのだろう

まあ 俺たちもその大半のやつに入るのだが・・・

俺と月冨もさっさと絵を描き終えて山の頂上に近い所にある

巨木の下で寝そべっていた

終「明日、明後日、明々後日とずっと同じような退屈な毎日が繰り返されるんだぜ 大佐」

月冨「……………いきなりどうした」

柊「いやぁ どこかの女子高校生の人みたいに宇宙人、未来人、超能力者がどうのこうの

とまでは行かないけど 少しは面白いことがあってもいいんじゃないかなって事だよ」

月冨「まあ 面白いことがあつたらいいかもしれないな」

柊「そうだろ？ 少しくらいは人生にスパイスがあつてもいいよな」

月冨「まあ 帰りにゆっくりと聞いてやるから今は寝させてくれ」

柊「そうだな 少し寝るか」

なんか揺れてるもう時間か？ まだそんな時間経ってない気がするんだが……

柊「大佐 もうそんな時間か？」

月冨「何寝ぼけてるんだよ早く起きろ！ 地震だ！」

この揺れは地震だったのか

二人は落ち着いて判断を下そうと動かずにいた だがその行動は間違った判断だった……

柊「やばいすごい揺れだっ！ってっわぁぁ」

月冴「柊！」

月冴は崖から落ちそうになった柊に急いで手を差し伸べたが一緒に落ちてしまう形になってしまった

ああ これ死んだかもな・・・ こんな死に方で終わりか
もうちょっと人生楽しんどけばよかったかな

柊は死を覚悟したかのように目を閉じた・・・

プロローグ（後書き）

なんか・・・バッドエンドっぽい気がする・・・
私だけか？

第一話 幻想入り 話（前書き）

二話目だぜえ

一応二話目の前編的存在

第一話 幻想入り話

．．．

．．．？

．．生きてる？

マジで！？ 崖と言える場所から落ちた気がするんだが．．．
もう死んだなこれ、とか思っていたのになあ．．．

よっ
と

おお まさかお前がいるとはな

月冨「お前も起きたか」

大佐がいるとはな

柊「なあ 大佐ここ何処だと思っ？」

月冨「向日葵があるし向日葵畑じゃないのか？」

柊「ですよー」

目の前にはそれはすごい量の向日葵

手入れがされているところを見ると誰かの向日葵畑なのだろう

さて俺たちはさっきまで何処にいた？崖のあたりにいたよな

そしてそこから二人そろって落ちたよな じゃあなんで・・・

柊「なんで崖から落ちたのになぜ向日葵畑にいるんだあああああああ
ああ！！！！」

月冨「とりあえず落ち着け」

柊「はい 済みません。で、これからどうする？」

月冨「とりあえず、ここがどこか知りたいな・・・」

????「こんにちわ ここに何か用かしら？」

二人「!？」

二人は同時に声のほうへ振り返った

そこには女性がいた緑の髪で顔立ちが整っていると言える

柊「……………ハッ こんにちは」

月冴「……………」

「???」自己紹介がまだだったわね、私の名前は風見幽香^{かざみ ゆうか} 貴方達の名前は？」

柊「つと 俺の名前は深神 柊です。」

月冴「斉藤 月冴だ。」

二人とも簡単に自己紹介をした

柊「ここに用があつて来たと言う事ではないんですが……………いきなりで済みませんが質問をしてもいいでしょうか？」

幽香「いいけど立ち話もなんだしあちらで話しましょう?。」

幽香が指した先にはテーブルや椅子が並べられていた

移動中に柊が月冴に小声で話しかけた

柊「おい どうしたさっきから黙って」

月冴「いや 特にどうってことは無いんだがな」 「??」

3人が席に着いた後柊から話を切り出した

柊「幽香さん 信じてもらえないかもしれませんが僕たちは気づいたらここにいたんです。」

「ここがどこか教えてもらえませんか？」

幽香「・・・貴方達やっぱり外来人ね。ここは幻想郷、おそらく貴方達の元いた所とはちがう世界よ」

なっ「・・・なんだってー」

柊「違う世界・・・ですか」

幽香「貴方達の居た世界は私達には「現代」と呼ばれているわ

そして、

此処「幻想郷」は、貴方達の住んでいる世界とは真逆の・・・

まあ

要するに危険な世界とでも言えばいいのかしら」

なんか命の危険にさらされてる？

つまりは・・・

柊「ここは幻想郷と言うところで俺らは俺らのいた世界つまり外の世界からなぜか来てしまった、という事か」

幽香「あら？驚かないの？」

柊「んゝまあ少しは驚いてますよ。でも疑ったりとかじゃなくて
知らなかった何かを発見したような感じですね。

例えば そこにある向日葵 俺は向日葵のことをしらなかった
として貴女に

これはなんですか？ と聞きます。貴方は俺に向日葵について
説明してくれます。

そこで俺は向日葵について知り、こういう植物もあるんだな
と思うでしょう？

でもそこに疑いは無いでしょう？ それと同じです。

まあ 流石に新たに知るものが世界 と言うのは規模が大き
きですがね」

.....

柊「.....話聞いてました？」

幽香「あら？もう終わったの？」

紅茶飲んでるし.....いいなあ

柊「まあ こうなるとは思ってましたけどね.....」

ん？大佐がまだ黙ってるな.....ん、なんか悪い予感がするな

月冴はまだ黙ったままだった

柊「さて 大佐そろそろ行くところか？ 幽香さん済みませんがそろそ
ろ行きます。

ありがとうございます。」

何か悪い予感がした柊は早く切り上げようとした

月冴「まあ　まて柊　俺も風見さんと話をしようと思う」

さつきから黙っていた月冴が言った

おいおいやっと思したと思ったらなんですかその台詞
あまりいい予感はないぞ

月冴「風見さん　そろそろ本性を表したらどうです？」

なっ　大佐やっと思したと思えば　何を言い出すんだ

柊「大佐！何を言い出すんだ失礼じゃないか！済みません幽k」

幽香「ふふ　何故ばれたのかしら？隠していたつもりなだけど？」

えっ　まさかの肯定！？

月冴「冗談はよせよ、さつきから攻撃を仕掛けようとしてたじゃないか。
どうせ俺が睨みを利かせなかったら仕掛けていただろ」

柊「えっ　そうなの？」

俺だけ置いてけぼりな気がするのはいのせいかな？

月冴「お前結構強いんだろ？最初俺らの背後を気付かれずに取った時は驚いたよ。」

確かに注意していなかったとはいえ背後を取ったのはすごいよな
てか 大佐黙ってると思ったらそんな事していたのか マジイケメン
うん大佐はイケメンだよな背も高いし顔も良い
・・・それに比べ俺は背もまあまあな方だし顔もすごく良いという
わけではないし
泣けてくるぜえ・・・

月冨「おい なんで泣いてるんだよ!？」

柊「いや 自分のルックスに対して・・・」

まあ 立ち直ろう うん いつかいい人が現れるってその日を待とう

月冨「まあ あまり悩まない方がいいんじゃない?」

そうしよう・・・ うん

第一話 幻想入り 話（後書き）

読んでくれてありがとうございます

初めに見た人なら解るけどタイトル変更した

第一話 幻想入り 戦（前書き）

前回の投稿から一週間以上経ってしまいましたね

第一話 幻想入り 戦

月冨「さて 質問をしよう 攻撃を仕掛けてこようとしたことに俺は応えてもいいのかな？」

幽香「応えるって 私とやり合おうとでも言っの？」

月冨「そう言ったつもりだったが？」

月冨の口もとに笑みがこぼれる

幽香「そこまで言うのだから腕には自信があるのよね

がっかりさせないでよ？」

どうしてこうなった……

しかも二人の中ではもう戦う方向なのね……

柊「はあ 大佐ーガンバレーオウエンシテルヨー」

俺は応援に回ろうじゃないか

幽香「あら？貴方はいいの？二人同時に相手をしてもいいのよ？」

二人相手に？何の冗談だそれ？

柊「言っときますけど月冨は強いですよ、舐めて掛からないほうがいいと思いますよ。」

それと俺は月冨がやばい時に参戦しますよ。」

柊は微笑を浮かべる

月冨「さて そろそろ始め様じゃないか。俺はいつでもいいぜ。」

月冨は楽しみでしょうがないというような顔だ
そして幽香と距離を取る

幽香「貴方のタイミングで初めてもいいわよ？」

月冨「ほう 余裕だな じゃあお言葉に甘えて俺から行かせてもらおう」

そう言った瞬間月冨は幽香に向って走り出した 月冨は初めに20m程離れてから始めたのだが
その距離を1秒程で10mほどまで縮めていた
それに対して幽香は・・・

幽香「へえ 人間にしてはやるようね」

笑みを浮かべていた 驚きではなく笑みそれは喜びのようにも見えるものだ

月冨は幽香に接近しボディーブローを入れた だがそれは持っていた傘で止められる
月冨は止められた瞬間に距離をとった

月冨「ふむ 止められるとは・・・意外だ」

幽香「それは私もよ？貴方本当に外の人間なの？

本当に面白くなりそうだな」

大佐の本気じゃないとしても止めるのはすごいな幽香さんにとって
も強い人なんじゃ・・・

幽香「さて今度はこちらから仕掛けようかしら これくらいで入た
ばらないでね？」

そう言った瞬間に幽香は月冴に光弾を放った

その数はまさに無数と言ふ言葉が似合うほどの量だった

月冴「ははっ これはすごいな」

月冴は一瞬驚愕の表情を見せたが次には笑っていた

月冴「当たったら痛いそうだな」

月冴はそう言いながらも弾幕に向かって走り出す

月冴は弾幕の中で当たるか当たらないかギリギリでかわしながらも
確実に進んでいた

何とか幽香の前まで一つも当たらずにたどり着く

月冴「今度こそは当てるぜ」

月冴は幽香にもう一度ボディーブロー・・・と、見せかけての
左フック!!

だが、それもまたかわされる

幽香「動きが遅いわよ?」

そう言った時、月冴を傘で吹っ飛ばした

月冴「っがあ」

柊「大佐！大丈夫か！？」

幽香は月冴を軽々と吹っ飛ばした

月冴「ああ 何とかガードして軽減できた」

あの大佐が攻撃を当てられないとはな・・・

柊「俺も参戦する」

柊はそう言った それほど幽香は強いという事だろう

柊と月冴はお互いにしか解らない合図を送った

月冴「よし 行くぞ」

柊「OK」

二人は同時に走り出した 幽香もそれに対し弾幕を展開した
二人ともかすりはしていたものの直撃はしていなかった
まずは月冴が攻撃を仕掛けるだがまたも防がれる
だが、これは予想の範囲内本当の目的は・・・

柊「吹っ飛ばええええ！！！！！！」

柊の打撃だった 柊は幽香の防御とほぼ同時に打ち込んだ

柁の打撃を受けた幽香は吹っ飛んだ

幽香「くっ 不覚だったわ」

柁「うまく当たったと思ったが・・・」

幽香が吹っ飛ばされたように見えたが実際は後ろに飛ぶことによつて直撃を避けていた

月冴が敵わないこともあつてか柁は手加減をしないつもりだった

月冴「もう一度仕掛けるぞ」

柁「応」

そう言い二人はもう一度幽香に近づく

今度は柁が先に仕掛ける またそれも交わされると思っていた

そしてかわされた瞬間に月冴が攻撃に移るそうしようとしていた

だが かし

幽香「二度も同じ手は通用しないわよ」

かわさなかった ガードでもなかった

幽香は近づいてきた柁に向かって傘を振る

柁「つつつつ」

柁に当たる

かわすと思つたんだがな攻撃が遅かつたか

痛つてえ ガードしたのになあ なんつつ怪力だよ

月冴「うまくいかなかったな 次はどうする」

柊「腕が痛いんだがお前は痛くないのか」

月冴「そのくらい我慢しろ」

そのくらいって俺はめっちゃくちゃ痛いんだが 大佐の腕は筋肉で守られてるのか？

幽香「敵の前で作戦会議？私は待たないわよ」

そう言った幽香は柊に向かって光弾を放った

柊は容易くかわした だが気づいた時には幽香が目の前にいた

柊「つつ」

始めに柊を吹っ飛ばす

月冴「くっ」

そしてすぐに月冴もやられる

二人とも同じ所に吹っ飛ばされた

柊「なんて速さだ」

二人とも立ち上がった その時幽香を見てみると

なんですかその顔はその顔を例えるなら

S っ気のある人が何かをいじめるような・・・
やばい死亡フラグ臭が・・・

マスタースパーク

その時二人は光に飲み込まれた

柊「大佐 大・丈・夫・か」

月冨「大丈夫・・・とは 言え・・・ないな・・・」

くっ 如何するべきか 流石にこの状況では戦えないよな・・・
仕方ないか・・・

柊「幽香さん今回は逃げさせてもらいます。また今度会った時に手
合せしてください。」

では また会いましょう」

そう告げ気づいた時には二人はもういなかった

幽香「逃げられたの・・・かしら？」

第一話 幻想入り 戦（後書き）

バトル面書くのは苦手だということに気づかされました
徐々に慣れていこうと思います

後、バトルも書くのでそこはご了承ください

第2話 逃走と闘争（前書き）

言い訳ですが 夏のうちは投稿できてもすごい遅いかもしれません
夏は忙しそうなので……

第2話 逃走と闘争

柊「はあ・・・はあ・・・」

二人は向日葵畑の近くの森に入り木の陰で休んでいた

月冴「おい 大丈夫か？」

柊「ああ 大丈夫・・・だ」

二人とも疲労していたが柊は特に疲労していた

柊「はあ だいぶ落ち着いてきた」

月冴「まあ 無理だけはするなよ」

柊「ああ 解ってるって 心配しなくても大丈夫だって」

月冴「そうか じゃあ、これからどうする？」

柊「人のいるところに行きたいな・・・人里だっけ？ そこを目指そう
治療しないとまずいからな」

二人は先の幽香との戦闘を逃げてきてこの森に来たのだが 二人とも満身創痍であった
だが治療したくても治療するための道具が無いのだ

柊「それよりも最後のあの極太レーザーはなんだ！？
あれくらって生きてるのも不思議だがな」

月冴「死なない程度に手加減した、という事か？」

柊「うーむ 幻想郷よくワカラン」

月冴「よし そろそろ行くか」

月冴は立ち上がりそう言った

柊「行くか・・・って 人里の方向がわかんねえ」

月冴「お前はどこに向かって歩けばいいと思う？」

柊は指をさし

柊「ふむ あつちとか？」

月冴「じゃあ そっち行こう」

柊「えっ・・・マジで！？ 俺適当に言ったよ！？」

月冴「お前の直感は恐ろしいからな」

ある日のこと

月冨の家に遊びに行った時 テレビには競馬の馬が映っていて
馬の紹介などをしていた

月冨「なあ 柊どの馬が一着だと思っ？」

柊「ん 9番」

月冨「なんで？ 人気低いぞ」

柊「なんとなく」

その後結果は6番が一着だった・・・
この位柊の勘は当たるのだ

二人が歩きだしてから20分程経った 二人とも疲労していたのも
あり歩いている最中は無言だった

バツ！

月冴は柎の前に手を出しいきなり止まった

柎「ん 如何した」

月冴は指をさした 柎は月冴が指を指した方に目を向けた
そこには蜥蜴の妖怪が立っていた

二足で立っていて全長2m程あるようだ

なんだアイツは蜥蜴とかけの化け物か？避けて通れば大丈夫か？

！？ あれは子供じゃないか！

妖怪の目の前には子供がいて襲われているようだ・・・

くそっ！どうする？俺と大佐二人で掛かっても今の状況じゃ守りながら切り抜かれるかどうか・・・
だけど・・・

そう考えている時にはもう体が動いてた

助ける一択だろうがああああッ！！

柊「うおらああああッ！！」

柊は飛び出し妖怪に攻撃を仕掛けた
不意打ちを喰らった妖怪は少しだけ飛んだ

柊「大丈夫かい？君は人里に住んでるのかい？」

少年はうなずいた

柊「じゃあこのまま人里に行つてできれば人を呼んできてくれないかい？」

まあ できれば早めにしてほしいかな

少年に心配をかけないように柊はできるだけだけの笑みを浮かべそう言った

少年は何度もうなずくとうまく動かない足で走って行った

柊「すまん大佐手伝ってくれ」

月冴「あの少年が襲われてるのを見てからこうなると予想できてるよ
それにこういうのはもう慣れたよ」

柊「サンキュウー それでこそ親友だ

さーて大将が起きてきたぞ」

妖怪は起き上がった 妖怪は完全に柊を敵と見なしたようで今にも襲い掛かる勢いだ

柊の攻撃を受けたもののほとんどダメージがないようだった それに対し二人とも満身創痍の状態だった

月冴「さて、この場を何とか乗り切ってあの少年を追うか」

さて飛び出したまでにはいいけどこっちは怪我人二人それに対してノードメージの化け物・・・

どうする もう一度使うか？ いや、やめた方がいいか 今度は確実に死ねるレベルだ

考えている時にはもう妖怪が動き出した

妖怪はそれほど速い動きではなかった 妖怪は手を振り上げそれを柊に向かって振り下ろした

柊は何とかギリギリでかわしたが本当にギリギリだった・・・

くっ 体がうまく反応しない 本当にこれはまずいな

月冴「柊 大丈夫か？ よし 行くぞ」

柊「おう」

始めに月冴が飛び出し攻撃を仕掛けた

月冴のストリートは妖怪に直撃した　だが妖怪は何もなかったのよ
うに立っている
妖怪は月冴に向け腕を振り回した　ただそれだけだったのだが月冴
はもろに喰らってしまった

月冴「ぐあああッ」

柊「大佐　立てるか！？とりあえず距離を置くぞ！」

柊は大佐の近くに行きそうというと手を貸した

やっぱり　大佐もダメージが酷いのか・・・
・・・仕方がない　死ぬ気覚悟で使っしかない・・・

柊「大佐・・・　仕方がない逃げよう　悪いが背負ってくれ」

月冴「・・・わかった」

柊「よし　いくぞ」

そう言うと月冴は柊を背負い　ゆっくりだが走って逃げ出した

二人は少年が走った方向に向かい　妖怪を撒いて休んでいた
二人とも疲労していた　柊に至っては呼吸が乱れ、汗もひどかった

柊「はあ・・・はあ・・・くっ はあ」

月冴「おい大丈夫かよ・・・」

柊「大丈夫・・・夫 とは・・・言えな・・・い」

月冴「とりあえず 追ってきてはいなさそうだな

お前が回復したらすぐに人里に向かおう」

くそっ ここまで疲れるとは そういやあの子は無事たどり着けたかな

柊「大佐 もう大分大丈夫だそろそろ行こう」

月冴「・・・まあ 大丈夫か 立ち上がれるか？」

そう言い柊に手を差し伸べた

柊「ああ ありがとう つ大佐あ 後ろ！」

月冴「!?!? があっ」

柊は月冴の手を取ろうとしたが

月冴の後ろにはあの妖怪がいた だが気づいた時には遅かった

柊「があっ」

追ってきたのか？それとも二体目か？ だめだ 意識が朦朧とする

はあ 幽香さんと戦ったりしななければ良かったかもしれないな

今更後悔しても遅いか・・・ もうだめだ・・・

柊の意識は闇の中に落ちていった・・・

第2話 逃走と闘争（後書き）

1話1話の長さはこのくらいでいいのでしょぅか？
とりあえずこのくらいで行こうかな？

第三話 見慣れぬ天井（前書き）

やはり遅くなりましたね

ゆっくり待っててもらえればうれしいです

第三話 見慣れぬ天井

ん？ここはどこだ？ 布団の中だという事は解った

柊は布団の中に入っていて目の前には見慣れぬ天井があつた

本当にここはどこだ？てかここに来る前は何してたんだっけ？
！！ そうだ！

ガバツ！

柊「俺たちは妖怪に襲われたんだっただ……」

俺生きてる……よな？俺は助かった、という事でいいのか
見たところ怪我は治療済みのようだな 大佐もいるな

柊の隣では月冴が寝ていた

大佐も……見たところ大丈夫そうだな
誰かが助けてくれたという事でいいのかな？

襖の開く音がした

??「おお 目が覚めたのか」

そこには女性が立っていた

髪は長く淡い蒼で凜とした雰囲気を持っていた

??「ああ そんな警戒しなくてもいいんだぞ」

警戒するなと言われても大佐はまだ目が覚めてないから
何かあった時には俺が何とかしないとイケないから
それは無理があるな

柊は心の中で呟いた

自分に言い聞かせるように……

柊は最初にその女性を見たときに警戒なんて言葉は出てこなかった。
・
・

それは第一印象がとても良かったせいもあった

やばかった大佐を見なかったら完全に警戒していた……

柊「いくつか質問してもいいですか？」

??「ああ いいぞ その前に名前を教えてくださいませんか？」

私の名前は上白沢 かみしろさわ 慧音 けいね だ

君の名前を教えてくださいませんか？」

正直柊は迷ったが

柊「……深神 柊」

名前を教えたものの警戒は解けてはいない

柊「では慧音さん質問させていただきますまずここはどこですか？」

慧音「ここは私の家だ」

ふむ 慧音さんの家と言う事はやっぱり慧音さんが治療したのかな

柊が考えをしていると慧音から話を振られた

慧音「深神殿 私の生徒を助けてくれて感謝する

本当にありがとう」

柊「なっ えっ？」

柊は驚愕を隠せなかった・・・ それもそのはず

慧音がいきなり柊に礼をし深々と頭を下げている

今 そんな状況だ

えっ？ なんで礼を言われている？どうしたらいいんだ？

柊は正直どうしたらいいかわからなかった

柊「えっと、あの！とりあえず顔を上げてください」

柊は慧音に顔を上げることが勧めた

もう警戒なんて無かった・・・

柊「なんで俺なんかに礼を？ むしろ慧音さんは俺たちの治療をし

てくれたのでは？」

慧音「さっき言った通り深神殿達は私の生徒を助けて

くれたのだよ」

柊「生徒・・・ですか・・・あつ　森で会った少年か!？」

慧音「ああ　私の生徒が森に遊びに行ってしまったて

その時に妖怪に出会ってしまった所を深神殿が助けてくれた
と聞いたよ

本当にありがとう」

慧音がまた頭を下げそうになったのを柊は見てそれを止め

今度柊が礼を言った

柊「いや　こちらこそ礼を言わせてください　俺たちの治療をして
くれたのって

恐らく慧音さんでしょう　ありがとうございます」

今度は柊が頭を下げた

二人とも頭を下げ合ったりしてこの状況がずっと続きそうなので
柊から話を振った

柊「俺達を助けてくれたのって慧音さんなんですか？」

柊は確認の意味も込めてもう一度聞く

慧音「ああ　そうだ　今はいないがもう一人助けてくれた人がいるぞ

そのうち会うだろう」

他にも助けてくれた人がいたのか　その人にも礼を言わないとな

慧音「そういえば深神殿はなぜ森に？それよりも二人ともボロボロだったのが気になるが・・・」

柊「ああ　それはこいつが起きてからでいいですか？

まだ質問したいこともありますし」

月冴を指さしてそう言った

慧音「そうだな　じゃあ起きてからにしよう」

そついや大佐が起きないが大丈夫なのか？

・・・トイレに行きたくなってきたな

柊「済みません　手洗い借りてもいいですか？」

慧音「ああ　いいぞ」

柊は立ち上がる　・・・が　しかし

ずっと寝てせいもあるのか体がうまく動かなく
足をもつらせてしまい転んでしまった

慧音「・・・」

柊「・・・」

・・・それだけならいいのだが

柊は転んでしまい結果慧音を押し倒す形になってしまった・・・

柊「……………あつ すつ済みません」

何とかそれを言ったがなかなか体が動かない
突然のことで思考が停止している状態に限りなく近い
その時月冴に動きがあつた

月冴「ん、ふああゝ んん？」

ここで月冴の目線で考えてみよう 目の前には柊と綺麗と言える女性
そしてその女性を押し倒す柊…………… 確信犯……………

月冴「俺は何も見てない 親友が女性を押し倒しているところなど見
てない、つと」

布団をかぶり現実から逃避するように

柊「大佐あああああ 誤解だああああああ！！」

柊の叫びは幻想郷の朝に響いた

第三話 見慣れぬ天井（後書き）

次は8月終わる前に出そうと思います

あの作者は投稿が遅すぎる！ とか思いながらも見てください

第四話 方針（前書き）

題名決めるのに困った・・・

今思えば題名の数字は漢数字じゃないほうがいいのかな？

第四話 方針

柊「大佐誤解だからな なっ？」

月冨「はいはい解ったから」

月冨がもう一度寝ようとしてから30分程後

月冨の誤解を柊が30分懸けて解いた

月冨は元々物分りのいい人なので誤解を解くのに

それほど時間は必要ではなかった………と思う

柊「俺がそんな変な気起こすと思うか？」

月冨「さっきの状況はそれにしか見えなかったぞ

ああ お前がそういう気ではなかったことは解ったからな」

本当にわかったのか？

慧音「誤解も解けたことだし朝食にしよう」

そういえば腹が減っていたな

まあ ずっと寝ていたようだしな当然か

そこまで世話になってもいいのだろうか……

案内され向かった部屋には朝食が用意されていた

白米、味噌汁、焼き魚、漬物どれもおいしそうだった

慧音「座りなさい」

立ち呆けていた柊たちに座るよう促す

柊「あつ はい」

柊たちもそれに応え座る

慧音「召し上がってくれ」

柊と月冴は本当にいいだろうか、と思ったが食欲には勝てなく箸を取る

二人「いただきます」

慧音「召し上がれ」

柊は最初に味噌汁に手を付ける

う、うまい 野菜の出汁も出てるし味の濃さも丁度いい

慧音「口に合うといいのだが」

柊「おいしいですよ 本当に」

慧音「それはよかった」

慧音は嬉しそうにそう言う

柊「まるで味の宝石ば・・・」

月冴「古い」

柊が言葉を言い終わる前に月冴が突っ込む

柊「うん 古かったね・・・」

分かる人いるのだろうか・・・

青年食事中・・・・・・・・

二人「ご馳走様でした」

慧音「お粗末さまでした」

どれもおいしく完食し 二人とも満足していた
食事が終わりお茶を飲み落ち着いた頃

慧音「差支えがなければ二人に聞きたいのだが・・・」

二人はなぜあの森でボロボロになっていたのだ？」

二人はお互いに顔を見合わせた後

柊「じゃあ 俺から説明しますよ」

柊は幻想入りしてから最初に幽香に会った事
そして幽香と戦いあの森へ行きあの場面に遭遇したことを詳しく説
明した

慧音「あのフラワーマスターに勝負を仕掛けたのか・・・
よく逃げてこられたな・・・」

慧音は驚愕に目を見開いていた

柊「えっ よくって・・・なにかまずかったんですか？」

慧音「いや 結構な有力者だからよく逃げられたな、と思ってな」

確かに強かったな・・・
あっ、そういえば

柊「慧音さんこの世界の人間は皆光の弾を放つことができるんです
か？」

月冴「それは俺も気になったな」

月冴も気になっていたようだった

慧音「ああ それは皆ができるという事ではないが
そういう事のできる人もいる 私もその中に入るぞ」

柊「へえ 慧音さんも」

慧音「そうだそのうち機会があったらスペルカードについても教えよう」

スペルカードまた知らないものが出てきたな
ふう 幻想郷まだよくわからないな・・・
もっと詳しく知りたいな

慧音「それで深神殿達はこれからどうするのだ？」

柊「どうするって・・・何を？」

慧音「何時^{いつ}幻想郷を出るか、などということだ」

柊「・・・考えてもいなかった」

柊は慧音に言われてやっと気付いたこれからどうするか
何時幻想郷を出るか・・・

月冴から声が掛かった

月冴「そのことなんだが・・・」

どうも歯切れが悪い

柊「どうした月冴？言ってみるよ」

月冴が重々しく口を開く

月冴「俺は・・・俺は幻想郷居に居たいと思っている」

柊「いいんじゃないの？」

月冴「……………ハア??」

つかさは素っ頓狂すっとうきやうな声を上げた

月冴「そんな軽く……………良いのかよ？」

柊「軽いつて……………じゃあ月冴は俺が駄目だつて言つたら諦めて帰るか？」

月冴「……………」

月冴は黙る

柊「それにな月冴……………俺も幻想郷に居たいと思ってるんだよ」

月冴は予想外の言葉に驚きを隠せていない

柊「だから俺は賛成だし俺も居ようと思つよ」

月冴「……………そうか　ありがとう」

??「慧音、慧音ーいるかー？」

今後の方針が決まった、と言うところで慧音を呼ぶ声があった

慧音「ん　ちょっと行ってくるな　待っていてくれ」

慧音はどこかに行つてしまい二人が取り残されてしまった

第四話 方針（後書き）

投稿スピードが初めに比べ落ちている……

何とかしなければ……！

第五話 能力（前書き）

眠い・・・ZZZ

第五話 能力

慧音が部屋から出て行って少しした後話し声が聞こえた

??「慧音！昨日の二人いるか？」

慧音「ああいるぞ それよりも落ち着け」

??「合わせてくれないか」

慧音「ああ いいぞ 居間にいるぞ」

そしてこちら側に近づいてきた そして、襖があいた
そこには女性が立っていた 声からも予想はできていた
その女性は手に持っている新聞らしきものと柀たちの顔を
交互に何度も見てうなずいたりしていた

慧音「妹紅、いきなりどうしたんだ？」

慧音が顔を出した

妹紅「慧音これを見てくれ」

そう言い妹紅と呼ばれた女性は慧音に新聞を押し付けるように渡した
慧音は渡された新聞を読んだ

慧音「……………ふむ」

柁「慧音さんそれ見せてもらってもいいですか？」

柁は慧音が読み終わったのを見計らって声をかけた
慧音は手に持っていた新聞を柁に渡した

柁「文々。新聞・・・か 何々 ふむ・・・ふむふむ

おお これは・・・」

そこに書かれていたものは前日幻想入りした時の俺らについてだった
幻想入りしてからの幽香との戦いな始まりから終わりまでだった

柁「ほい 月冴」

月冴「ああ」

月冴は俺から新聞を受け取ると黙って読み始めた

月冴「おおおお」

柁「どうしたんだよ月冴 慧音さんまでびっくりしてるぞ」

いつも無い月冴でなんか新鮮だな

月冴「いや こんなにも詳しく書いてるし 何時見られていたのか
驚きだよ」

確かに何時見られていたんだ？俺が見ていた時には
俺と大佐と幽香さんしかいなかった気がするが

慧音「それよりも気になることがあるのだが・・・」

月冴「どうしたんだ？」

慧音「その最後斉藤殿たちが逃げる時に風見幽香がピタリと止まったとその新聞に書いてあるのだが それはどどういう事なんだ？」

ああ そのことか どうしたらいいんだろうか

柊は月冴に顔を向ける 月冴も同じように柊のほづを見ていた

月冴「まあ いいだろう」

月冴がそう言った

柊「それについては俺が説明した方がいいか？」

月冴「まあ そうだろうな」

柊「ええっと じゃあまず 信じてもらえるかは解りませんが俺達は不思議な力を持っています」

こんなこと言って信じてもらえるかな？

慧音「いや 私たちは信じるよ なあ？妹紅」

妹紅「ああ そうだな」

柊「ありがとうございます 簡単に言つと俺は対象の時間を止めます

やって見せたほうがいいかもしれませんね」

そう言い慧音と妹紅の前に立った

柊「じゃあ 二人とも俺を見てください動いても目を離さないようにしてください」

柊は少し右に動いたそれに応じて慧音と妹紅は目で柊を追う

柊が止まると慧音たち止まる その後柊が動いた時には二人は動か
なかった

そして柊が二人の背後に回った時

二人「「えっ!?!」」

柊「こつち・・ですよ」

二人は瞬時に振り向く その顔はとても不思議なものを見るような
顔だった

柊「今途中で力を使いました 多分俺が瞬間的に移動したように見
えたのではないでしょうか

実際はゆっくり動いてましたけど」

柊はまた慧音たちの前に行き座る

柊「まあ 今みたいな方法で幽香さんから逃げたわけですよ」

妹紅「すごいな あのメイド長みたいだな」

柊「メイド長?それはわかりませんが・・・ でも これにはいく

つか欠点があるんですよね」

慧音「欠点？」

柊「まず とても疲れることですね これ2、3分使うだけで疲れ
てしまうんですよ

そして 二つ目は詳しく言うと時間を止めると言う事ではない
んですよ

本当は対象の体内時計を止める・・・と言う方が合っていると思
います」

柊の説明が終わり慧音と妹紅はうなずいていた

慧音「そういえば俺達と言っていたが斉藤殿も何かあるのか？」

月冴「ん ああ あるぞ」

月冴は残っていた茶を飲み干して説明を始める

月冴「俺の持っている力みたいなものは 簡単に言えば身体能力強
化だな

まあ 足が早くなったり 力が強くなったりとかだな 俺は
それだけだ」

柊「月冴のは俺と違って能力使って疲れるとかは無いですよ
俺のよりも使い勝手がいいんだよなあ」

妹紅「外の人間が能力持ちって言うのは珍しいな」

柊「あつ そういえばきちんと自己紹介してませんでしたね

深神 柊です よろしくお願ひします」

月冨「斉藤月冨だ」

慧音「上白沢 慧音だ こちらこそよろしく」

妹紅「藤原妹紅ふじわらのもいこうだよろしく それと妹紅でいい」

4人はそれぞれ自己紹介をしたのであった

第五話 能力（後書き）

補足みたいなものですが、月冴と幽香の戦いでは月冴は能力を使っています

1秒ほどで10m近く進むっておかしい気がしてきたな・・・

第6話 ニートは嫌だ(前書き)

毎回タイトル考えるの困るなあ

第6話 ニートは嫌だ

自己紹介が終わった後、それは慧音から言われた

慧音「ところで 二人は幻想郷にいる間 どこに住むんだ？」

柊「……………」

月冴「……………」

やばい……………忘れてた

そうだななんか月冴と俺で幻想郷に居ようとか言ってたけど
一番大事なことを忘れてたああああ

そんな事を思っていると慧音から声が掛かった

慧音「……………やっぱり考えてなかったか」

……………まったく言うほど考えてなかったな

大佐は野宿とか言い出しそうだしな マジでどうしよう

慧音「それなら 家に来ないか？」

……………やばいな 追い詰められて自分の都合のいいような幻聴が聞
こえてきたな

さてここは聞き逃した様を装って聞くべきだろう

柊「今　なんか言いました？」

慧音「ああ　私の家に来ないか？」

柊「月冴・・・お前は今なんて聴こえた？」

月冴「・・・家に来ないか？　と言う言葉が聞こえたよ」

どうやら俺の頭は大丈夫だったらしい

柊「でも・・・いいんですか？　仮にも男ですしそれに二人なんて大変でしょう」

慧音「はは　二人なら大丈夫だろ　それと

空いてる部屋があるから一つの部屋に二人になるがそれでもいいのだが」

柊「月冴はどうなんだ？」

月冴「俺らには行く場所もないだろ　これほどうれしい提案はないさ

ここはお言葉に甘えさせてもらおう」

柊「そうだな　それではお願いします慧音さん」

そう言い俺と月冴は深く頭を下げた

慧音「頭を上げてくれ　こちらこそよろしくな」

慧音さんには助けてもらってばかりだな　それにしても本当に助かったな

「……ん？ちよつと待てよ この図は……」

慧音さんに養ってもらう 俺自由にやる ニート？

柊「ニートは嫌だあああああ！！！！！！」

月冴「どうした柊！いきなり立ち上がって とりあえず落ち着け」

柊「落ち着いてられるかあつ！！俺らこのままだとニートだぞ！！
仕事探さないといけねええええ」

慧音「ま、まあ 仕事を探すなら人里で探すといいと思うぞ」

何の仕事をするべきか……いや幻想郷にはどのような仕事がある
かさえ解っていない
とりあえず職を探さなければ！！

慧音「仕事を探すのは明日にきなさい 仮にも怪我していたんだ」

柊「………そうします」

駄目だ疲れた 起きて数時間しかたってないけど今日はもう寝たい
……
やっぱり力を使うのは駄目かな？まあ怪我していたのもあるのかも
しれないが

柊「慧音さん済みませんがなんか疲れてしまったみたいで部屋で寝
てもいいでしょうか？」

「ついでに使っていい部屋を教えてください」

慧音「ああ 部屋はさっき寝ていた部屋を使ってくれ 昼食に起こ

しに行こうか？」

柊「いや 今日はまだ寝て明日を迎えると思います 今日起きな
かったら起こさなくてもいいです

その時は夕食もいいですので・・・」

慧音「わかった ゆっくり寝なさい おやすみ」

柊「はい おやすみなさい」

この後柊は部屋に向かいすぐに寝た
そしてその日はもう起きることがなく明日を迎えた・・・

第6話 ニートは嫌だ(後書き)

一度はニートって楽しそうだなあって思ったことはありませんけどね

第七話 就職（前書き）

今回は早くできた（自分にとっては）

最近メイプルストーリーをやり始めた

そのせいで遅くなったら済みません

第七話 就職

柊が翌日起きて朝食を取った後それは朝柊が慧音に聞いた

柊「慧音さんは仕事してるんですか？」

慧音「ん？ああ しているぞ」

まあ そうは思っていたけど

柊「何の仕事をしているんですか？」

慧音「人里で寺子屋を開いて子供たちに勉強で基本的な事を教えるよ」

柊「へえ 寺子屋を」

月冨「寺子屋？ああ俺達のところでいう学校か」

寺子屋か そうだ

柊「そうだ慧音さん幻想郷についての本とがありますか？」

慧音「ん〜 歴史の本とかならあるぞ」

柊「できればそれを貸してもらえませんか？ 幻想郷について知りたいんです」

慧音「そういつ事ならいいぞ」

慧音さんは快く了解してくれた

慧音「もう少ししたら寺子屋に行かないといけないから帰ってきてからでいいか？」

柊「いいですよ 借りる側ですし慧音さんの都合のいいときで」

あ そうだ

柊「そうだ慧音さん 俺は今日仕事を探しに行こうと思っているので出かけてきますね」

月冴「仕事・・・探しに行くのか」

柊「そりゃあ 仕事しないと な それに今俺たちは金がない・・・金がないから必要なものも買えない だから仕事しないといけない

ってことだな あっ 別に月冴がしたくなくればしなくてもいいとは思っぞ」

月冴「なんかそう言われると嫌だな なんか・・・・・・ヒモみたいで」

そんなつもりで言ったわけではないんだがな

慧音「すまないがそろそろ行くな 昼食は・・・どちらか料理はできるか？」

柊「一応俺も月冴もできますよ」

慧音「なら 悪いが適当に作って食べてくれないか？」

柊「はい わかりました」

慧音「夕方くらいには帰るよ じゃあ 行ってきます」

柊「はい 行ってらっしゃい」

月冴「行ってらっしゃい」

そう言い慧音は家を出て行った

柊「そうだ 月冴はどうする？」

月冴「どうする って なにを？」

柊「いや 仕事を探しに行くか行かないかって話」

月冴「俺はいいかな・・・面倒だし」

面倒って・・・おい

柊「はあ まあいいや 仕事見つけたら月冴も入れるか聞いてみるよ」

月冴「ありがとう それでこそ柊だ」

柘「はいはい 俺ももう少ししたら行くからな」

月冨「おう わかった」

とりあえず人里いかないと駄目なのか……
あつ 人里つて何処どこだ？ まあ 何とかなる……か？

柘は少しした後

柘「じゃあ 行ってくるわ 一通り聞いたら戻って来るわ」

月冨「おう 気を付けて行って来い」

柘「ああ 何に気を付けるのかは分からないが 行ってきます」

そう言い柘は家を出た

柘が家を出て数分歩いたら人里だと思われるが見えた

ここが人里かな？ 建物がたくさん建っているしたぶんそうだろうな
全部木造なのかな？ 見た感想は昔の日本って感じが

人里には店を開いている人も多く仕事を探すのにはちょうど良かったようだ

よしとりあえず訊きまわってみるか

・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

慧音「ただいま っ て うわあっ 深神殿そんな部屋の隅でどうしたんだ!？」

月牙「はは ちよっと・・・ね」

妹紅「ん?どうしたんだ?」

そこで妹紅が慧音の後ろから顔を出した

妹紅「うわあっ 部屋の隅が灰色だ 主に三角座りしている人」

慧音「本当にどうしたんだ?」

柊「はは 職が見つからないや・・・幻想郷も就職氷河期中ですか
仕事探せばどこかで働けるだろうなんて考えていた自分が甘すぎたのかな?」

はは「職に就くのがこんなに大変だったとは・・・」

慧音「……仕事が見つからなかったのか」

柊「……はい」

はは 人里の端から端まで探したけど見つからないとはな……

慧音「それは大変だったな まあ 気を落とさずにまた頑張ればいいじゃないか」

柊「そうですねまた今度ががんばることにします」

そろそろ立ち直らねばな

慧音「じゃあ 夕食を作るから待っていてくれ

後 妹紅も一緒に食べていくから」

柊「あっ はい わかりました」

あっ 作るの手伝ってこようかな……

そう思っただけ行動に移そうかと思っただけ月冴から声が掛かった

月冴「柊 これを見てくれ」

そう言われ月冴が差し出したものを見る

それは一つのバッグだった

柊「これがどうした？」

月冴「いや今日昼に俺たちの部屋で見つけてな…… これお前の

じゃないか？」

ん？俺の？ 確かに俺もこのバッグ持っていた気がするが・・・

柊「でも、ここは幻想郷だ なぜ俺のバッグがここに来れるんだ？」

そう これが俺のバッグだったとしても そこがわからなくなる

妹紅「聞いてて思ったんだけどさ 一応自由に外から幻想郷に物を
持ってこれる奴が一人いるんだよ」

隣で話を聞いていた妹紅が言った

月冴「そんな奴がいるのか？」

妹紅「でも なんでそんなことをするのかってとこだよな まあ
基本よくわからない奴だけだな」

柊「一応慧音さんにも聞いてみたら？」

妹紅「そうだな そうしよう」

その後柊は慧音の手伝いをし 全員で夕食を取ったのであった

第七話 就職（後書き）

次も早く投稿できるように頑張ろうと思います

第八話 バッグ

夕食を取った後

月冴「慧音さん これ俺らの部屋に置いてあったバッグなんですけど
慧音さんは心当たりとかありますか？」

そう言いながら月冴は慧音にバッグを渡す

慧音「うーん 心当たりはないな」

月冴「そうですか」

慧音「それと私の家にこんなバッグは無いぞ」

そうなるとこれは慧音さんのバッグではないことになるな

月冴「……………開けてみるか」

柊「マジで！？開けちゃっていいのかよ」

月冴「仕方がないだろ このまま誰のかわからないまま誰のかわか
らないまま

置いとくのも嫌じゃないか？」

まあ そうかもしれないが……

月冴「と言つわけで はい」

柊「はあ？」

月冴「はあ？ じゃないだろ お前が開ける 早く」

月冴は誰のかわからないバッグを差し出してくる

何と言つ理不尽

柊「まあ 仕方がない開けるか・・・」

柊はゆっくりとバッグを開ける

その中身は・・・

柊「服？と手紙か？」

バッグの中は服と手紙であつた
とりあえず服を見てみた

柊「この服は・・・俺のか？」

サイズと柄が柊の持っている服と同じものだった

妹紅「その手紙は？」

この手紙か・・・

月冴「開いてみたら？」

開けていんだろうか……開けるけど

柊は手紙の中を簡単に確認した

柊「……どうも紫と言う人物が置いていったようだね 何故置いて行ったのかは書いてないな……」

てか俺の服……家から持ってきたのか？鍵かけてるはずだし 家にいることがおかしくないか？

まあ 助かるからいいけどさ……

慧音「よかったじゃないか」

全員がバッグの中身を出していく その中で柊は気になるものを見つけた

柊「なんだこの封筒？」

柊が見つけたのは茶色い封筒 少し厚いが……

妹紅「それは？」

月冴「開ける」

強制なのね……もういいけど

柊「……これは 20人の諭吉が俺を見ている」

そこには20人の諭吉……もとい20万円があった

柊「『これもあなたの家から持ってきたわ 勝手に持ってきてごめんなさいね by 紫』

って隠し場所ばれてる!？」

妹紅「それにしても本当に紫のせいだったとはな・・・」

月冴「何故こんなことをするんだろうか・・・意味が解らないな」

慧音「彼女の考えていることなんてわからないよ」

慧音が笑いながら言う

そんな笑いながらいう事でしようか

柊「まあ とりあえずは助かったな 明日人里で必要なものでも買うか」

月冴「どこに何があるとかわからないぞ」

柊「今日回ったから大体わかるから大丈夫だよ」

本当に端から端まで歩き回ったからね・・・

柊「じゃあ慧音さん明日は人里に買い物に行きますね」

慧音「ああ わかった」

柊「ふあああ 今日歩き回ったから疲れたな・・・

そろそろ 風呂入って 早めに寝るかな」

月冴「俺もそうするかな・・・疲れたし」

妹紅「それじゃあ 私もこころ辺で帰るかな」

柊「あ、妹紅お休み」

妹紅「お休み じゃあな」

じゃあ風呂でも入るか・・・

部屋

月冴「柊 寝る前に少し話がある」

柊「何だ？・・・もしや！愛の告白とか！？・・・って

ちよっ まずその握りしめている拳おろすんだあ！！」

月冴「さて お望みどおり愛の鉄拳でも喰らわせてやるっか」

柊「すみませんでした 調子乗りました」

すぐに謝る俺

月冴「まあ いい それで話だが・・・」

柊「そうそう なんなんだ？」

月冴「あれだ こっちでは能力をどうするかってことだ」

柊「あゝ こっちでなら使ってもいいんじゃないか？

幻想郷もそういつのあるみたいだし」

月冴「そうか 話はそれだけだ」

柊「では俺から質問だ 今日何してたの？ 疲れた

とか言ってたから気になった」

月冴「今日は筋トレや体力作りしていた やっぱり体力落ちてるな」

月冴らしいな

柊「もう疲れた俺は寝る」

月冴「そうか お休み」

柊「お休み」

本当に疲れていたようですぐに寝つけた・・・

第九話 香霖堂

前日言っていたとおり柘と月冴は人里に来ていた

柘「月冴の服を買おうと思うが・・・どうなのがいい？」

月冴「どうなの・・・と言つと？」

柘「えっと、和服か洋服かどっちがいい？」

月冴「洋服もあるのか？見た感じなさそうな雰囲気だが・・・」

柘「最初俺もそう思ったが1件売っているとこ見つけたよ」

月冴「じゃあ洋服にしたいな いつも着ているものだしな」

柘「なら洋服買に行くぞ」

で、店に

柘「こんにちはわ」

「ん、昨日のお兄ちゃん 昨日も言っていたとおり仕事はないよ？」

店のおっちゃんが言った

柘「いやいや 今日お客だよ こいつの服を買いに来たんですよ」

そう言い月冴を指さす

「そうだったのかいそれは早とちりしてしまったね」

柊「いえいえ まあ今日は服買いますんで 適当に見ていってもいいですか」

「ああ いいよ」

青年物色中……………

柊「よし このくらいあればいいか」

月冴「……………買いすぎじゃないのか？」

柊「いや このくらいあった方がいいって」

月冴「そうか？」

柊「そうだって じゃあ支払するぞ」

あつ 今更だけどこの金使えるのか？
俺らの世界だけってことはないよな…………

柊「あの このお金って使えますか？」

お札を見せてみる

「んん 使えるよ」

おつ ちゃんと使えるみたいだ

柊「じゃあこれで」

お札を二枚だし支払いを済ませる

柊「じゃあ行くか月冴」

月冴「ああ」

「ああ ちよつと」

おっちゃんが呼び止めようとしたが二人は行ってしまった

「お釣りも持っていないで行っちゃったよ」

柊「さて後買うものとかあるか？」

月冴「いや もういんじゃないか？ 必要な物は大体買ったんじゃないか？」

柊「なら いいか」

あっそうだ

柊「俺行ってみたいところあるんだが・・・」

月冴「なら行こうじゃないか それはどこなんだ？」

柊「まあ ついて来れば分かるよ」

青年移動中・・・・・・・・

柊「多分ここだ」

月冴「・・・・・・・・多分？」

柊「ああ たぶん」

月冴「もしかして・・・来たことないな？」

柊「無いよ」

月冴「・・・そうか」

柊「いいじゃないか 入れば問題ないさ」

月冴「香霖堂・・・か」

柊「こんにちは」

????「こんにちは」

中にはいかにも優男という感じの青年がいた

????「やあ 見ない顔だね」

柊「ええ 最近幻想入りしたものでして」

????「ああ そういえば新聞に載っていたような・・・」

柊「載ってましたね」

霖之助「僕はもりちかりんのすけ森近霖之助君たちの名前を覚えてくれないかい？」

柊「俺は深神柊です」

月冴「斉藤月冴です」

お互いに簡単に挨拶をした

霖之助「今日はどうしたんだい？」

柊「外の物があるとか聞いたので来てみたんですよ」

霖之助「じゃあ ゆっくり見ていくといいよ」

笑顔でそう言ってくれた

柊「ありがとうございます」

お言葉に甘えて物色することにした
店の棚には色々な物があった

月冨「セガサオーン・・・懐かしい」

柊「セガ○ターン？なにそれ？」

月冨「これだよ 昔見たことがある でも今知っている奴少ないかもな」

たしかに俺は知らないな

そんな感じで懐かしい物やら珍しい物を見ていたら
ふと目に留まるものがあった

柊「これは・・・？」

月冨「どうした？・・・刀？」

柊「ああ・・・こんなもの置いていて大丈夫なのか？」

そう言うと霖之助さんから声が掛かった

霖之助「幻想郷では刀を持っていても特に何も言われないよ」

月冨「そうなんですか？」

霖之助「うん でもその刀はお勧めしないな」

月冨「どうして？」

霖之助「その刀ある人から貰ったんだけどね・・・その刀は誰にも抜けないんだ

その人が言うには曰くつきらしくて何でも大昔その刀で何人もの人を

斬った人がいたらしくてその人も最後にはその刀で自害してしまつたとか・・・

斬られた人の怨念がついてるとか呪いだとか言っていたよ
それでその後その刀を所有した人はその刀に憑りつかれるとか憑かれないとか

月冨「・・・なんかすごいな」

霖之助「いや でも噂だから本当かはわからないだよ」

霖之助さんは笑いながら言った

霖之助さんが話している間妙な違和感のようなものを感じた

この刀をどこかで見たことがある気がする

ならどこで見た？本？ネット？おじさんの家とか？

必死に考えてみるものの何もわからない思考はすべて空回りするばかり

それでいてなぜかその刀に興味が湧いた

終「その刀抜けるか試してもいいですか？」

霖之助「別にかまわないよ」

月冴「本気か？」

柊「呪いだとか怨念とか面白そうじゃないか」

月冴「……俺も試そう」

柊「結局お前もじゃないか」

月冴「お前が試してみたいとか言わなかったら

試す気は起きなかったがな」

霖之助「じゃあ どっちが先に試す？」

霖之助さんが柵から刀を下していた

月冴「俺からいいか？」

柊「いいぞ」

月冴は霖之助さんから刀を受け取ると

左手で鞘右手で柄を握る

その場に緊張が走った気がした

月冴「いくぞ」

そして月冴が抜こうとする………が

月冴「くっ 抜けない」

いくら月冴が鞘から抜こうとしても1ミリも抜けなかった

柊「月冴ふざけてる？」

月冴「お前にはこれがふざけてるように見えるのか？」

柊「いや・・・見えない」

霖之助「やっぱり駄目か・・・」

霖之助さんは笑いながら言ったが少し残念そうだった

月冴「ほら お前の番だ」

こちらは悔しそうだった

柊「ああ」

俺は月冴から受け取り月冴と同じように構える

柊「じゃあ いくぞ」

今度は俺が抜こうとする
すると・・・

霖之助「・・・まさか」

月冴「・・・」

抜けてしまった 刃がすべて見える

柊「まさか抜けるとはね」

まったく自分でも驚きだ

どうせ抜けないだろうと思っていた

それにしても・・・

柊「いい刀だな」

俺も少しは刀についてわかる方だ

柊「霖之助さんこの刀いくらですか？」

霖之助「えつと買うのかい？」

柊「ええ 欲しいので いくらかなと」

霖之助「それなら別にお代はいいから持って行っていいよ」

柊「えつ 本当ですか？」

霖之助「うん 元々それを抜けた人が欲しいと言っただけでいいよ」
「たったから」

柊「じゃあ いただいていきます」

その時外から元気のいい声が聞こえた

????「こーりん 今日こそあの刀を抜くからなー！」

その声の主は一人の少女のものだった

第十話 弾幕ごっこ

????「うわっ 刀を抜いてる!？」

少女が入ってきて同時に言った

少女は白と黒の魔法使いみたいな服だった しかも箒も持っている

霖之助「魔理沙 とりあえず落ち着いたら?」

魔理沙と呼ばれた少女は深呼吸し始めた

そして……

????「その刀お前が抜いたのか?」

柊「あ、ああ」

霖之助「まずは自己紹介したら?」

????「あつ 私は霧雨^{きりさめ}魔理沙^{まりさ}だけ

よろしくな」

柊「深神 柊です こちらこそよろしく」

魔理沙「あつ 敬語はやめてくれ」

柊「ああ わかった」

魔理沙「くそー 私より先にその刀を抜くとはなー」

霖之助「魔理沙は毎日来て刀を抜こうとしていたんだよ」

霖之助さんが付け加えてくれる

柊「へえ〜」

魔理沙は、んんと唸っていた

魔理沙「よし！柊、私と勝負だぜ！」

柊「なんでだよ・・・」

いくらなんでもいきなり過ぎるでしょ・・・

魔理沙「お前が負けたらその刀は私のものだぜ」

柊「だからいきなり過ぎるわ！・・・じゃあ もし魔理沙が負けたら？」

魔理沙「私が負けたらその刀は私のものだぜ」

柊「勝つても負けても!？」

魔理沙「私の物は私の物、柊の物も私の物」

柊「何と言うジャイアニズム!!」

ここまでツッコんだの久しぶりすぎる・・・もう疲れた

魔理沙「冗談だぜ 私が負けたら諦めるぜ」

柊「そうしてもらわないと困る てか俺にメリット無くな？」

魔理沙「おおっと 戦わないと言っ選択肢はないぜ！」

ひどすぎだろ

柊「仕方がないか 受けて立つよ」

そう言いながらもちよっとだけわくわくしていた

魔理沙「じゃあ 外に出ようぜ」

魔理沙と俺だけではなく霖之助さんと月冴も外に出た

霖之助「僕たちは離れてみているよ」

はぁ、と溜息をつき。構える。

どうしてこうなったんだろう……まあ、でも

柊「楽しくなりそうだ。」

魔理沙「おっ、そういうノリの良さはいいと思うぜ。」

柊「開始のタイミングは……霖之助さん、お願いしてもいいですか？」

霖之助「僕は構わないけど・・・魔理沙は？」

魔理沙「それでいいぜ。」

霖之助「じゃあ・・・開始っ！！」

魔理沙「まずはお手並み拝見だぜ！」

魔理沙は俺に向けて幽香さんみたいに光弾を撃ってきた。力量を計らうとしているのかそれほどの量ではなかった。

このくらいの量なら問題ないな・・・

軽く横に動きかわそうとした。

躲かわした、そう思ったが・・・

柊「!?!」

躲した弾幕は後ろに飛んではいかず、自分の動いた方向にそれてきた。

しかし、反射神経のほうまさが勝ったのか躲すことができた。

これは追尾型か!?!だけどそれ程性能はいい訳ではないな、

これなら大丈夫だ!

魔理沙「今のはギリギリだったじゃないか。その程度じゃ高が知れるぜ！」

さらに弾幕が厚くなる、さすがにこれはきつそうだ。

まずい、まずいぞこれは！躲せる気がしないぞ。なんて無理ゲーですか！？

そう思いながらも何とか躲そうとする……が。

柊「っがあー！」

躲しきれずに何弾か当たってしまう、そのせいで体制が崩れまた当たる。

すぐにまずいと思ったのか、魔理沙が弾幕の展開を中止する。

魔理沙「お、おい！大丈夫か！」

大丈夫なはずが無い、体のあちこちが痛い。だが、そう答えられるはずもなく……

柊「大丈夫だ、手加減無用だ。」

そう、強がりと言う。はっきり言って弾幕の中止をしてもらったのはかなり助かっていた
あのままだと立ち上がることもさえも出来なかっただろう。

クソッ！自分よりも年齢の低いしかも少女相手になんて無様なんだ。自分の非力さに苛立つ。

魔理沙「ほんとに大丈夫なのか？もうやめた方がいいんじゃない……」

柊「大丈夫だっ！！」

少しきつい言い方になってしまった。人に当たるなんてなんて最低

なんだろうか・・・

魔理沙「ああ、もうどうなっても知らないぞっ！」

魔理沙が吹っ切れたのかもう一度構え、弾幕を撃とうとするがそれを月冴が止める。

月冴「少し待ってくれ。」

魔理沙「ん？何だ？」

月冴「柊、一言だけ言わせてもらおう・・・冷静になれ!!」

月冴は本当にその一言だけ言つと、腕組みをして下がった。

そうだった、幽香さんとの戦いの後思っていたじゃないか。
小父おじさんに習った事はこんなことじゃないはずだ。

そう心の中で呟き、深く深呼吸する。

そのせいか落ち着いた気がする。

柊「これからは本気だ。」

そう言ってみたものの、正直本気なんてものが出せるのか不安なところがあった。でも、少しくらいは格好つけたいじゃないか。

魔理沙「ああ、もう知らないぞ!？」

魔理沙は吹っ切れたのか先ほどのような弾幕を展開してきた。

さつきみたいなおことにはならないようにしないとな。

冷静な判断それが俺の武器。

弾幕を見て躲すのではなく、予測して躲す。

次の展開を予想して動く。

次々に向かってくる弾幕を柊はすべて躲していた。

それも最低限の動きで・・・

霖之助「すごい・・・一つも当ってないじゃないか。」

魔理沙が本気を出してはいないとは言え、柊はこれまでの弾幕で一つも当っていなかった。

それだけではなく徐々にだが魔理沙に近づいていた。

よし！一気に行く！

その瞬間魔理沙の弾幕が止み、動かなくなった・・・

その瞬間に柊が魔理沙との距離を縮め、魔理沙の後ろに回り込む。

魔理沙「！？柊は何処に行ったんだぜ！？」

魔理沙が動き出したがその時はもう魔理沙の視界には柊は消えていて・・・

柊「こつちだよ。」

魔理沙「うわぁっ」

柊が魔理沙の足を払い魔理沙がうつ伏せに倒れる形となり

その上から押さえこみ身動きが取れないようにした。

柊「はあ、はあ……これでどうだ」

魔理沙「うう、降参だぜ……。」

それを聞き魔理沙を放した。

霖之助「二人とも、お疲れ様。」

霖之助さんと月冴が近づいてきた

魔理沙「おい、柊！お前は瞬間移動できるのか！？」

柊「？できないけど？」

魔理沙「一瞬で回り込んだのはなんだったんだ？」

柊「ああ、あれはだな。なんて言うか、能力みたいなものだよ。

瞬間移動じゃなくて時間を止めたようなものだけだね。ツ痛。」

魔理沙「ど、どうしたんだ！？」

柊「戦っている最中に頭を使ったからその反動みたいなものだよ。

まあ、疲れからの頭痛だな。少ししたら治るさ。」

能力も使ったことになってかなり痛いけど。

霖之助「はい、これ。」

柊「ん？」

霖之助さんが差し出したものはあの刀だった。

霖之助「君が勝ったんだからこれは君のものだろうか？」

それでいいんだよね？魔理沙。」

魔理沙「ああ、それは柊のものだぜ！」

柊「ありがとうございます」

霖之助さんから刀を受け取った。

柊「そろそろ帰ろうか、月冴？」

月冴「別にかまわない。」

霖之助「帰るのかい？また来てね、歓迎するよ。」

柊「ありがとうございます、ではまた。」

魔理沙「じゃあ、またなー」

帰り道に思った

なんでここまであの刀にこだわったんだろうか？

あんなに怪我したのに・・・ただ単に魔理沙に負けたくなかっただ

けか？

それよりも本当に刀にこだわっていたのだろうか。

まあ、どうでもいいことかな？

それよりも・・・

柊「なあ、月冴。なんか機嫌悪くないか？」

月冴「そうでもないが？」

柊「それなら良いけど。」

でもやっぱり、帰ってから機嫌は悪そうだった。

第十話 弾幕じっしん(後書き)

十一話 紅い霧

月冴の突き出した腕が柊の顔に向かってくる
それを柊は躲し、その腕を取り投げようとするが・・・

月冴「甘いぞ。」

柊「うわっ」

月冴がその勢いのまま柊に体当たりする形でそれを防いだ。
それと同時に柊の態勢を崩すことに成功する。
それでも柊は態勢を戻すが、その時何かに気付く。

柊「ん？」

それが一瞬の隙を与えてしまった。
それを月冴が見逃すはずもなく、月冴が柊の足を払う。
結果柊は仰向けに倒れる形となった。

柊「つて、お、おい待て」

月冴が柊の上に乗る、柊の顔面に月冴の拳が直撃する

柊「参った！」

寸前で止まった。

柊「はあ〜」

月冨が退いてから言った。

月冨「まだまだ、駄目だな。」

柊「だからこうして、訓練してるんだろ。」

月冨「別に俺みたいな戦い方をできるようにしなくてもいいと思うがな、

お前は考えて戦う方法があるし、俺は直感で戦うしな。」

柊「でもなあ」

俺の能力は疲れるし、あの戦い方も疲れるしデメリットが大きいからなあ。

月冨「それよりも、だ。」

柊「ん？」

月冨「お前たたつてる最中に余所見よそみしなかったか？

最後の方ほう。」

柊「ああ、それが。いやあ、なんて言うか周りあかがなんか紅くない？」

柊と月冨がいた場所は慧音の家から少し歩いた所にあった開けた場所だった。そこら全体が紅かった。

月冨「・・・確かに紅いな。これは霧みたいだな。」

柘「紅い霧？そんなのあるのか？」

月冨「俺に聞くな、俺だってわからないさ。だが、実際紅い霧がかかっているのは

のは錯覚じゃないと思うぞ。」

柘「とりあえず帰ろうか。」

とりあえず帰ることにした。

柘「ただいま。」

そう言うと、慧音が急いで向かってきた。

慧音「大丈夫か二人とも！」

柘「えっ？特に何もありませんが・・・」

いきなり過ぎて驚いてしまいまともな返事ができてなかった。驚いていたのは俺だけではなく、月冨も同じようだった。

慧音「うむ、大丈夫そうだな。はあ、良かった。」

慧音さんが安堵の胸をなでおろしていた。

それにしてもいきなり過ぎて状況が把握できない。

とりあえずどうしたのか聞いてみることにした。

柊「慧音さん、どうしたんですか？」

慧音「ああ、中に入って話そう。」

柊「で、どうしたんですか？」

慧音「二人とも外にいたんだよな？紅い霧がかかっていたのは知ってるよな？」

柊「はい。」

慧音「前にもこういう事があってだな、その時に人間はそれのせいで体調を崩したりとあったんだ。今回はまだそういう事はないみたいだが。」

月冴「それで、俺たちの心配をしていたと」

慧音「ああ」

柊「まあ、大丈夫そうですけどね。他の人たちは・・・大丈夫なんですね？」

慧音「ああ、でも前の例があるから皆一応家に籠こもってるよ。」

柊「誰の仕業なんですかね？」

慧音「多分……紅魔館こうまかんの吸血鬼しゅわいの仕業しわざだと思う。紅魔館の方から霧が発生してるみたいだしな。でも、またやるとは思えないんだけどな」

月冴「前もそいつが？」

慧音「前はそうだったよ。」

月冴「前はどうやってそれを解決した？」

慧音「霊夢れいむたちが倒しに行った。」

柊「月冴……もしかして」

月冴「ああ、俺達でこれを解決しようじゃないか。」

言うと思いましたよ……

慧音「馬鹿なことを言うな！紅魔館の奴らは手練ればかりだぞ。」

月冴「大丈夫ですよ、何とかかります。」

何処からその自身は出てくるんだ？

まあ、月冴なら解決してしまいそうだけどな……

柊「俺も行きますんで、危なくなったら逃げてきますよ。」

だから大丈夫ですよ。」

てか、吸血鬼か……血抜かれて死んでしまつとかないよな？

幻想郷にはいろんな奴がいるもんだな、魔理沙は魔法使いだとか言

つてたしな。

慧音さんは人間ではないらしいし・・・どう見ても人間にしか見え
ないけどな。

慧音「行くならこれを持っていけ。」

慧音さんから渡された物は、一枚の紙と数枚のカードだった。

柊「カード？」

だけど両面を見たけど何もかかれていない。

慧音「説明はそれに書いてある。お前たちなら使いこなせるかもし
れないな。」

月冴「よくわからないが、感謝する。」

柊「月冴、もう出るのか？」

月冴「ああ、準備したらすぐに出よう。」

十一話 紅い霧（後書き）

月冴と柊の異変解決の始まりです。

十二話 出発

月冨「さて、行くか。」

俺と月冨はすぐに出る準備を終えた。

慧音「気を付けてな」

慧音さんが心配そうにそう言う。

柊「安心してください慧音さん。いざとなったら月冨を

措おいて逃げてきますよ。」

俺は冗談交じりにそう言った。

月冨「それならお前が逃げ出す前にさっさと解決しないといけないな。」

慧音「それは頼もしいな。」

軽く笑いながらそう言ってくれた。

柊「じゃあ」

『行ってきます!』

柊「で、だ月冴。紅魔館の場所わかるの？」

月冴「ああ、この前の森を抜けたところに湖があるそうだし、その湖の先らしい。」

さつきから月冴が何かを見ている。

よく見てみると、慧音さんに渡されたものようだ。

柊「月冴、何見てるの？」

月冴「・・・おそらく説明書。」

恐らくってどういうことだよ・・・

月冴は何も言わず見ていた紙を俺に渡してきた俺もそれを受け取り一通り目を通してみる。

柊「・・・・・・・・。。。」

月冴「俺にはさっぱりだし、こつこつするのはお前に任せる。」

ん〜、どういう事だろうか？

月冴「意味がわかったら教えてくれ。」

・・・・・・・・

柊「とりあえずカード10枚あるようだし、5枚ずつ持っておこう。」

5枚取り月冴に渡す。

柊「多分これは魔法とかを使えるようになるのかな？」

自分の能力に同じような物になるのだろうけど・・・。」

月冴「お前なら時間止めるような感じのになるのか？」

柊「ああ。多分だけどね。使える時は絵とか文字とかが

かいてあるみたいだよ。」

月冴「今は何もかかれてない様だが？」

柊「さあ？今は使えないんじゃない？」

表も裏も何も書かれていない状態
で真っ白のままだ。

月冴「ま、いずれ使えるようになるか。」

そんな感じで話をしていたら、もう森の前までについていた。

月冴「この先だ、入るか。」

この森は幽香さんと会ってから入った森だ。

幽香さんに挨拶していいこうかとも思ったが、

紅魔館に向かう途中の道にないし、月冴が出来るだけ早く

紅魔館に向かいたいと言っていたのでなしだ。
何でも先に解決されたくないとか・・・
それは月冨が解決する前提じゃないか！！

柘「ところで月冨、紅魔館に行つて原因がそれだったら
どうするの？」

月冨「もちろん。そいつら懲らしめて解決する。」

柘「そんな心構えで大丈夫か？」

月冨「大丈夫だ、問題ない。」

本当なんだろうか。

月冨「それよりお前刀持つてきていたんだな。」

俺の腰には先日買ったあの刀があった。
買ってからは毎日欠かさず手入れしていたほどの刀を気に入って
いた。

柘「まあ、護身用くらいの気持ちでね。」

月冨「ふふ、本当に使う羽目になるかもしれないぞ。」

出来れば使いたくないけどね。

そんな話をしながら10分ほどたった頃。

月冨「ほら、そろそろ森から抜けるぞ。」

月冴にそう言われて前を見ると森が終わり、湖が見えた。

柊「おお」

湖なんて見るのは初めてだったからそんな言葉が出てしまった。

柊「結構広いんだな。」

月冴「ああ。そしてあれが紅魔館だろう。」

月冴の指さす方を見ると、屋敷と思われるものが見えた。

月冴「さて、もう少しだな。湖を迂回しないといけないか。」

でも迂回したらかなりの距離になるんじゃないか・・・その距離歩くのか？

月冴「俺なら走れば十分ほどで行けると思うが、お前はどうしようか。」

月冴は能力があるからそれで時間を短縮できるけど俺はそんなことはできないから置いてけぼりにされてしまう。どうしようか。

柊「月冴だけ先に行けば？」

月冴「お前はどうする？」

柊「俺は後から行くよ。この距離なら2、30分で行けるだろ。

だから先に行ってもいいよ。」

月冨「……そうするか。先に解決していてもなににも文句は言っ
なよ?」

月冨は笑いながら言った。

楽しそうだな。

月冨「じゃあ、先に行く。また後でな。」

月冨はそう言うのと走って行ってしまった。

相変あいかわらず速いな、これなら10分も掛からないんじゃないのか?

俺もゆっくと走るか。

俺も月冨に少しでも早く追いつけるように、

紅魔館を目指し走り出した。

十三話 妖精

10分ほど走っただろうか。

時計を見ると走り出してから9分程経っていた。

早ければ月冴はもう着いたかな？

月冴は10分ほどで着くだろうと言っていたから。

もう紅魔館こうまかんに着いたか、その近くにいるだろう。

俺も早くしないと、とは思うが距離が長く

なかなか着く心配がしない。

後20分も走らないといけないとなるとかなり疲れる。

20分走るとは問題ないが、疲れて懲らしめるどころか
返り討ちにされてしまうな。

遅くはなるけど休憩を挿はさめながら
走ろうかな、なんて思っていたら。

???「やい、その人間！」

何処からか元気のいい声が聞こえた。

その声の持ち主を探してキョロキョロ周りを見てると

「こつちだよ」と上の方から声が聞こえてきた。

少し首を上げてみると。二人の少女がいた。

いや、浮いてる。いや、飛んでる。

「???? チルノちゃん。」

片方が心配そうにしている。
その少女は羽?が生えてる。

「???? 大ちゃん、大丈夫だよ!」

チルノと呼ばれた少女には氷の羽がある。
羽がブームなのか?
いやいや、そうじゃなくて

柊「なんか俺に用?」

チルノ?「お前ここで何してるんだ?」

柊「紅魔館に向かっている最中なんだが?」

大ちゃん?「あの吸血鬼のいる?」

柊「ああ、それであつてと思う。」

チルノ?「そういえばまたあそこから紅い霧みたいなのが
出てきたね。」

柊「それは本当か?」

大ちゃん?「ええ、本当ですよ。」

少し警戒しながらも教えてくれた

柊「ああ、そんな警戒しないでくれ。」

俺の名前は深神 柊だ。君たちの名前は？」

チルノ「あたいはチルノだよ。そしてこっちが大ちゃん。」

元気がいい子がチルノで、少し警戒気味な子が大ちゃんらしい。

大ちゃんが「どうも」と言いながら挨拶してくれた。

大ちゃん「でもどうして紅魔館なんか？」

柊「友人と一緒にこの異変を解決しようとしてるんだよ。」

まあ、その友人が一人で解決してくれそうだけど。」

大ちゃん「でも、友人さんが見当たらないようですけど。」

柊「そういつは先に行ってる。そいつのほうか

足速いから先に行ってもらってるんだよ。」

チルノ「そう言えば、さっきものすごいスピードで走ってる奴がいたよ。」

柊「多分それが俺の友人だよ。」

大ちゃん「大丈夫なんでしょうか。一人で向かうなんて。」

そんな危ないのか？

チルノ「大丈夫だよ。アイツらよりあたいのほうが強いよ。」

なんとって、あたいがサイキョ だからね。」

チルノが最強なのか・・・それなら問題ない気がしてきた。
いや、チルノが強いからって紅魔館の人が弱いことにはならないだ
ろ。

柊「やっぱり心配だ。」

心配になってそう言葉にしてしまう。

それを聞いて大ちゃんが「あの〜」と控えめに
提案してきた。

大ちゃん「それでしたらいい方法がありますが・・・」

柊「ん？どんな？」

大ちゃん「私瞬間移動ができるので、多分それで紅魔館まで送れる
と思います。」

おおおお。なんて言うイベントだ。RPGみたいだ！

柊「頼めるか？」

大ちゃん「はい。」

大ちゃんはそう言って俺の近くに来た。
そして、一瞬にして周りの風景が変わる。

柊「おお！もしかして移動した！？」

大ちゃん「はい。」

柊「すげえええ、瞬間移動なんて存在しないと思っていたよ。」

俺が感動してすごいと何度も言っている

大ちゃんが少し照れくさそうにしていた。

大ちゃん「私は紅魔館に行けませんので、後はがんばってください。」

柊「おう、すごい助かったよ。ありがとう。」

じゃあ、と告げると大ちゃんは何処か行ってしまった。

瞬間移動でチルノの元へ戻ったのだろう。

さて、紅魔館まであと100m位だ早く行こう！

月冴がやられてないといいけど・・・

そう思っていたけど、まあ月冴がやられることはないかとも思っていた。

十四話 紅魔館

少し歩いて紅魔館こうまかんの門もんの前まで来ていた。
その門の壁に背中をつけ座っている、見知った顔がいた。

「おう、早かったな。」

月冴だった。まさか俺が来るまで待っていたのか？

「どうしたの月冴？俺のことでも待っていたの？」

「まあそれもあるが、ちょっと疲れたからな。
休みながら待っていたんだ。」

「疲れた？走ってか？」

「まあ、走って少しは疲れたが何よりは
その門番もんばんと戦ってな。それで、だ。」

月冴が指を指した方を見ると、少女が眠っていた。
いや、気絶してるのか？多分、月冴のせいだろう。
てか、月冴この人倒したのか・・・

「お前は休まなくてもいいのか？」

「まあ、俺は別に休まなくてもいいよ。」

大ちゃんに助けてもらったしな。

「じゃあ、俺ももういいしそろそろ中に入るか。」

今更だが、勝手に入るのはいいとは言えないよな・・・

そんな事は気にしない様子で月冴は門を開けて敷地しきちに入っていく。

月冴とはぐれないように月冴を追う。

霧のせいもあるのかもしれないが、屋敷を見たら紅かった。

紅色だから、紅魔館と言う名なのかな？

「よし、じゃあ入るぞ。」

月冴は俺にそう前置きをして紅魔館の扉を開けた。

「へえ〜」

中はすごく広かった。外見よりも広く見えた。

目の錯覚とかなのかな？

それにしても……

「紅いな……」

「ああ、紅いな……」

何処を見ても紅かった、壁から床まで紅い。

おかげで目が痛い。

「慣れるしかないな」

月冴の言う通りだな。

「とりあえず進むしかないだろ」

月冴はそう言うと言いき始めた。
俺も遅れないようについていく。

「と、言ってもむやみに歩くのも危険じゃないのか？」

月冴に聞いてみる。

「でも、あそこですっと突っ立てるのもいいとは言えないだろ」

月冴は歩きながら俺の問いにそう答えた。

それにしても長い気がする。

廊下を歩いてるはずなのに先が見えない。

これはおかしいどんな屋敷でもここまで長い廊下はないだろ。

おかしすぎるので月冴にも聞いてみようと思ひ、月冴に話しかけようとした。

「なあ、月冴……あれ？」

周りをキョロキョロ見渡してみても月冴がいない。

どこ行ったんだ？話しかけようとする直前まではいたと思うんだけどな。

俺はその場で突っ立てるのも仕方ないと判断し、とりあえず歩くことにした。

月冴も歩けと言うだろ、うん、これでいい。

「おーい、月冴いないのかー!!」

探索しながらも月冴を探してみるが、返事がない。

代わりに月冴ではない人影が見つかった。

誰だろう？

誰だろうかなんて、紅魔館の人だろう。

てかそれむしろやばくないか！？

こちらから挨拶をするべきだな！無視すると後々やばいだろうし。

「ハイ、マイネームイズシュウ」

挨拶はしたぞ、これで敵意がないことは証明されるはず！

その人はこちらを向いた。

「……馬鹿にしているんですか？」

「馬鹿にしないよ！？あいさつしたじゃないか!？」

「馬鹿にしてる感じがしたんですが……」

「してないって」

ん？紅魔館のメイド長か……そう言えば慧音けいねさんが紅魔館のメイド長は

俺みたいなのを使う、みたいなことを言っていたような……

ふむ、この人どこかで見たことがあるような気がするようなしない
様な……

「貴女あなたとどこかであった事ありましたっけ？」

「馬鹿にした次にはナンパですか？しかもかなり古典こてんてき的な方法で」

「いや違うよ、ナンパじゃないよ！？本当にあなたを見たことがある気がするんですよ」

「……ストーリーカ？」

「もう嫌だああああああ！……！」

メイドさんに悪いように誤解されてる。
どうしてこうなった……

「最後のは冗談です。私も貴方あなたを見たことがある気がします」

お互いに知り合っているとゆづことは、どこかであった事があると
言う事になるよな？

じゃあ、それはいつだ？

そこまで頭フル回転させ、考えた所で声を掛けられた。

「それよりも一つ質問します、貴方はこの霧を止めに来たのですね
もう答えは知っていると言わんばかりの感じだな。

「……不本意だけどそうです」

「不本意って、なんで来たのよ……」

「いやあ、友人に付いてきたまですよ。いわば保護者的な感じですよ」

「でも止めるのですね」

「そうですね」

このままだと戦闘に入りそうだな、だってナイフ持ってるよあの人も、指の間に何本も挟めて構えてるよ。

「そうだ、名前を聞かないと。俺の名前は深神柊です。名前を教えてくださいませんか。」

メイドさんは少し考えた後に答えた。

「……私の名前は十六夜咲夜（いざな）さくや（さくや）です。この紅魔館のメイド長を務めています。」

お嬢様の邪魔をする者は排除します」

やっぱりそうなるのね……

俺も軽く飛んだり軽い運動をしてから構えた。

「まったく、一番避けたいことが起きる瞬間だよ」

そう悪態をついたが少しばかり楽しくなりそうだなとも思った。だけど、今更ながらこの状況はまずいと思う。

だって、メイドがナイフ持って構えてるんだぜ？
手かあれ痛いですまない……な。

「あの、咲夜さん？それ俺に刺さりませんか？
痛いじゃすまない気がするのですが……」

俺は咲夜さんのナイフを指さし尋ねてみた。

咲夜さんはそれに対し少し考えた後に答えた。

「……少し痛いかもしれませんが、死ぬことはないと思います。
当たり前によれば……あるいは」

「えっ、何？死んじゃうの？」

咲夜さんが露骨に目を背ける、マジで心配なんだけど。

「まあ、そうはならないように狙いますよ」

そうしてもらわないと困る。

「さて、あまり長くお話をしてる場合じゃないの、
侵入者の排除をお嬢様から言われているのよ。
手加減はしないわよ」

その言葉を言い終わった瞬間、目の前にいたメイドが消え
その代わりに俺の視界を埋め尽くす程のナイフが俺に刃を向けて
俺の周りに浮かんでいる。いや、向かってくる。
それに対して俺は何もできなかった。
いや、刀で目の前のナイフを何本かだけはじいた。
それだけしかできなかった、そんなのは何もしていたいと同じだ
った。

ナイフの痛みを感じなかった、当たったかも分からぬまま
俺の意識が暗い闇の中に落ちていった。

十四話 紅魔館（後書き）

書いたのはいいけど投稿し忘れていたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8063u/>

親友と共に幻想入り

2011年12月26日23時47分発行